

目撃記憶の正確さと確信度の関係に関する心理学的研究

—情報検索のダイナミズムが A-C 関係に及ぼす影響—

学位論文内容の要旨

本論文は、司法における目撃記憶、とりわけ犯人識別の正確さと確信度の関係 (Accuracy-Confidence relationship : A-C 関係) を問題として取りあげ、実験心理学的な手法により、顔の再認記憶における A-C 関係について検討したものである。論文は6章から成る。以下、各章について概要を述べる。

1. 第1章

ここでは、判例や先行研究の知見をレビューし、その知見にもとづき、犯人識別供述では確信度の根拠として非ターゲット情報が参照される可能性があること、そのために良好な A-C 関係が見られない可能性があることを指摘している。

2. 第2章

第1章での議論にもとづき、確信度評定における非ターゲット情報の参照の過程を図式的に示している。犯人識別においては、面通しに犯人(学習した旧項目)が含まれるか含まれないかが問題となる。そこで、再認の対象が旧項目である場合と新項目である場合を分けて分析する枠組みを提案し、その上で、記憶痕跡のある旧項目よりも記憶痕跡のない新項目の再認において、確信度評定のために非ターゲット情報が参照されやすいという仮説を立てている。

3. 第3章

第2章で提案した枠組みにおいて、顔写真を材料とした実験的検討(実験1, 2, 3)が行われている。各実験の内容は以下の通りである。

実験1は、(1)新項目では旧項目に比べ良好な A-C 関係が見られないだろう、(2)しかし(司法の実務においてよく行われるように)再認を繰り返すと、新項目においても新項目を再認テストで二度見る事から生じる非ターゲット情報が参照されるようになるだろう、という予

想のもとに行われた。実験手続きは、まず複数の顔写真を提示し、直後および5日後に旧項目（学習時に提示された項目）および新項目（学習時に提示されなかった項目）に対する再認テスト（再認判断および確信度評定）を行うというものであった。その結果、1度めの再認テストにおける A-C 関係は、旧項目では良好、新項目では無相関であった。しかし2度めの再認テストでは、新項目の A-C 関係が負の相関関係となることが示された。これらの結果から、(1)新項目に対する1度めの再認テストでは、先行研究が示唆するように、記憶痕跡だけでない、種々の非ターゲット情報が参照されるが、(2)2度めの再認テストでは、(1度めの再認テストで提示された新項目への) 既知感が非ターゲット情報として参照される、と考察している。

続く実験2、3では、新項目の確信度の根拠とされる非ターゲット情報について、さらなる検討が行われている。

実験2では、実験1の2度めの再認テストで問題とされた非ターゲット情報の性質が検討されている。2度めの再認テストでは、再認の回数（2度）と学習から再認テストまでの遅延（5日）の要因が交絡していた。そこで実験2では、学習の5日後に1度だけ再認テストを行った。その結果、新項目における負の A-C 関係は見られなかった。このことから、実験1の新項目では、1度めの再認（不特定の情報）から2度めの再認（新項目への既知感）へと、参照される非ターゲット情報が変化したために、A-C 関係が無相関から負の相関関係へと変化したのであろうと考察している。

実験3では、実験1の新項目の1度めの再認テストで参照されたと考えられる、非ターゲット情報の性質が検討されている。再認判断の二過程説によれば、情報処理には処理時間の早い潜在的な処理と、より長い時間を要する意図的な処理がある。また、時間圧をかけることで処理に時間のかかる意図的な処理を抑制することができる。そこで、再認テストにおいて時間圧をかけ、相対的に処理の遅い非ターゲット情報の参照過程を抑制した。その結果、新項目の A-C 関係は無相関のままであった。このことから、実験1の1度めの再認テストで参照された非ターゲット情報は、相対的に処理の早い情報であったと考察している。

4. 第4章

以上は、再認を繰り返した事態での非ターゲット情報の性質と、それが A-C 関係に及ぼす影響について調べたものであるが、第4章では、積極的な情報検索を行った場合の非ターゲット情報と、それが A-C 関係に及ぼす影響について調べている（実験4、5、6）。

実験4では、再認テストで学習時の環境的文脈（顔写真の背景）を検索させ、そこで得られる情報が A-C 関係に及ぼす影響を検討している。その結果、統制群では実験1と同様、A-C 関係は旧項目では良好、新項目では無相関であったが、写真背景を想起させた群（想起群）では、新旧両項目において良好な A-C 関係が見られた。また、写真背景を言語化させた群（言

語化群)では、新旧両項目において不規則な A-C 関係が見られた。このことから、非ターゲット情報の検索活動のあり方が、A-C 関係に異なる変化を生じさせると考察している。

実験5では、遅延が上記の非ターゲット情報、引いては A-C 関係にどのような変化をもたらすかが検討されている。上述の実験4の参加者に4日後、再認テストを繰り返したところ、言語化群の A-C 関係は非ターゲット情報が参照される以前の A-C 関係へと回帰的に変化することが示された。このことから、非ターゲット情報が参照され、A-C 関係に変化が生じたとしても、時間の経過などにより非ターゲット情報の参照が困難になると、A-C 関係は非ターゲット情報が参照される前の関係性へと回帰的に変化し得ると考察している。

実験6では既知の人物が被疑者になる場合を想定し、犯人識別時における判断対象の既知性が A-C 関係に及ぼす影響について検討している。まず、ターゲット刺激(旧項目)として既知顔の写真と未知顔の写真を提示し、続いて旧項目および新項目に対する再認判断および確信度評定を行った。その結果、既知顔では実験1と同様の傾向が見られたが(旧項目では良好な A-C 関係、新項目では無相関)、未知顔では異なる結果が得られた(新項目でのみ良好な A-C 関係)。このことから、写真帳やラインナップの特定の項目から得られる既知感は、それ以外の項目の確信度評定にも影響を及ぼす可能性があると示唆している。

5. 第5章

以上の実験1-6では、確信度評定尺度として、パーセンテージを用いてきた(50%-100%)。ここでは、異なる確信度評定尺度(“全く自信が無い—非常に自信がある”:6件法)を用いて同様の実験を行い、実験結果が特定の評定尺度に依存しないことを確認している。

6. 第6章

一連の実験から得られた知見に基づき、確信度評定における非ターゲット情報の力動的な参照過程と A-C 関係の関係性について、総括的な議論を行っている。確信度と正確性の対応や不对応を理解する第二章の枠組みを修正し、精緻化するとともに、実務への提言も行った。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 仲 真 紀 子
副 査 教 授 阿 部 純 一
副 査 助 教 授 結 城 雅 樹

学 位 論 文 題 名

目撃記憶の正確さと確信度に関する心理学的研究

－情報検索のダイナミズムが A-C 関係に及ぼす影響－

一般に、高い確信度でなされた証言は信頼性が高いと受けとめられる傾向にある。しかし心理学的知見によれば、目撃記憶の正確さと確信度は必ずしも対応せず、このような不对応が、捜査や法的判断の誤謬の原因となるという指摘がある。本論文は、先行研究や判例をもとに、正確性と確信度の不对応は、確信度が記憶痕跡以外の情報（非ターゲット情報）にもとづいて評定されるために生じるとし、その枠組みで、非ターゲット情報の性質、および非ターゲット情報を参照することが A-C 関係に及ぼす影響を検討している。以下、本論文の研究成果に対する審査委員会の評価を述べ、その上で審査結果を述べる。

1. 本論文の研究成果

強い確信度をともなう目撃証言であっても、結果的には誤りであったという事例は多い。本研究はこのような司法の問題から出発し、確信度と記憶の正確性には関係があるのか、ないとしたら、確信度はどのようにして評定されるのかを問題にした。本研究の成果として、以下の三点を挙げることができる。

第一は、従来、言語的な刺激において検討されてきた正確さと確信度の関係（Accuracy-Confidence relationship : A-C 関係）を、目撃事態を考慮し、顔写真を材料として検討し、その性質について重要な知見を得た点である。特に司法の問題を見据え、再認刺激が旧項目（実際に目撃した項目）である場合と新項目（実際には目撃しなかった項目）である場合とに分けて分析を行い、前者においては比較的良好な A-C 関係が見られること（つまり、確信度が高ければ記憶の正確性も高い傾向があること）、後者においては正確性と確信度が無相関になること（確信度の高低は正確性の高低と関連がないこと）を示した。

第二は、確信度が記憶痕跡だけでなく、種々の外部情報を反映するものであることを示し

た点である。再認を繰り返すことにより A-C 関係は変化する (実験 1, 2)。一方で、再認に時間圧をかけても、A-C 関係はあまり変化しない (実験 3)。これらの結果から、確信度は記憶痕跡だけでなく、繰り返しによって生じるとされる新項目の記憶痕跡情報や、時間圧の影響を受けないとされる無意図的な情報により評定されている可能性が示された。

第三に、A-C 関係は認知的な処理や材料の性質により、容易に変容し得るものであることを示した点が挙げられる。実験 4, 5 では想起時に積極的な情報検索活動 (学習した写真背景のイメージ化や言語化) を行うことにより A-C 関係が変化することを示した。実験 6 では、既知顔と未知顔を混ぜた事態で再認を行うと、そうでない場合とは異なる A-C 関係が得られることを示した。これらのことから、確信度は積極的な検索活動や学習を通して得られる情報により、変化するものであることが示された。

本研究では、これらの知見を基盤として、司法における正確さの指標として確信度を用いることの危険性を指摘するとともに、よりよい A-C 関係が得られるような心理学的介入についても考察している。これらの知見や提言は、学位論文としてふさわしい、オリジナリティの高い有用な成果である。

2. 審査の要旨

以上の成果に加え、本研究は、従来学習・記銘過程が問題とされることが多かった記憶研究において、想起・検索の過程に焦点を当て、司法における A-C 関係を論じたという点でも重要である。特に、「確信度」が実質的な意味をもつ司法の問題とからめながら、「確信度は記憶痕跡 (だけ) を反映する」という古典的な考え方に疑義を呈し、改めて、確信度と正確性の関係を問題にしたこと、確信度がどのような情報にもとづき評定されるのかを明らかにしたことは新しい。

ただし、全く不十分な点がないというわけではない。例えば、確信度が認知心理学、あるいは広く心理学のなかでどのように位置づけられるのか、A-C 関係の研究が心理学全般にどのような貢献をなし得るのかといった基本的問題は十分に議論しつくされていない。しかし、これらの問題は本研究の価値を下げるものではなく、今後の研究活動により、十分解決可能である。システムティックに組み立てられた 7 つの実験を通じて、A-C 関係に関する新しくかつ重要な知見を見出し十分な成果を挙げた点で、本研究の意義は大きいと結論できる。

なお、これらの成果の一部はすでに国内外の学会で報告され、高い評価を得ている。また、審査付きの学会誌にも掲載されており、オリジナリティのある研究として認められている。

これらの点を総合的に評価し、審査委員会は、本論文の著者石崎千景氏に博士 (文学) の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。